

作品タイトル

『恩知らずの鶴』

元にした作品のタイトル

『鶴の恩返し』

著者名

川瀬えいみ

あらすじ

家族も友人もない孤独な老女が、通りすがりの父子に親切にしてもらう。

彼等に恩返しをしようとする老女。恩返しを拒む父子。

父子とのやりとりで、老女は、自身の孤独のわけを知る。

特記事項

現代人が孤立に陥る理由に関する一考察。

本編文字数

4912 字

季節、曜日にかかわらず、私は毎朝七時ちょうどに起床する。パジャマのまま、冷凍しておいた一膳分のご飯を解凍。今日のおみそ汁の具は豆腐とネギ。メインは鮭の切り身。キャベツと大根の浅漬けを少々。食事を済ませたら、軽く室内を掃除。洗濯は週に一度だけ。一人暮らしだと、洗濯機をまわせる量の洗濯物がなかなかたまらなくて、いつのまにか洗濯は週次の作業になってしまった。

その後は、台風でもきていない限り、身支度を整えて、必ず外に出る。ウォーキングなんて洒落たものじゃない。よく言えば、健康のための散歩。実際には、足を萎えさせないために、自身に課している義務的作業だ。

目的地は図書館。自宅アパートから徒歩十分のところに区立図書館が一館あるのだけれど、私はあえて徒歩三十五分の場所にある別の図書館に向かう。図書館通いの目的が「脚力維持のために、ある程度の距離を歩くこと」だから、自然にそういう選択になる。

六十七歳、一人身の年金暮らし。家は賃貸アパート。

正社員として地道に四十数年間働き続けた甲斐あって、贅沢をしなければ暮らしていけるだけの年金をもらえている。結婚せず、子を儲けず、家も買わず、金のかかる趣味を持つこともなかったのも、何かあった時に慌てずに済む程度の貯えもある。

故郷で兄夫婦と暮らしている両親とは、年に一、二度、連絡を取り合うくらい。

身近に頼れる人はいないので、現役時代から健康でいるために規則正しい生活を心掛けてはいたのだけど、さすがに年金をもらう歳になると、身体のあちこちにガタがくる。目、歯、足、肩等々。

会社員時代には、鬼の霍乱で三、四年に一度風邪をひくことがあるかなしかの健康体なのにもかかわらず、毎月数万円の健康保険料を天引きされることに憤っていたのに、今は、月々数千円の保険料を申し訳なく感じる頻度で病院に足を運んでいる。

(丈夫だけが取りえだったのに……)

胸中で思わず呟いてしまったのは、昨日、外出先で倒れるという、人生初の

経験をしてしまったせいだ。

昨日曜日、日々のルーティンの流れに乗って図書館に出掛けた私は、どうにも読書に集中できなくて、いつもより早めに図書館を出た。正面出入口で外気に触れた途端に、すうっと全身が冷えて、突然——本当に突然、私の意識は消えてしまった。

気付くと、私は図書館の一階受付前の長椅子に横になっていて、見知らぬ男性に介抱されていた。私が意識を失っていた時間は、おそらく十分以上二十分未満。

男性は三十代半ばくらいに見えた。最初は、当然のごとく、図書館の職員なのだろうと思った。何とか目を開けたけど、瞼が重すぎて開け続けていられない。身体を起こせるかどうかもう不安な状態。

耳だけは、ちゃんと働いているようだった。

「お父さん、ぼく、借りる本決めた。やっぱり『つるのおんがえし』にする」という子どもの声が近づいてくるのを聞き取れたところを見る（聞く）と。

声変わり前の子どもでも、男の子の声と女の子の声は違うのね——と、私は、およそどうでもいいことを考えた。

あまり男の子が好む本ではないと思ったのだが、彼にはその本を選ぶ理由があったらしい。

「悲しい終わり方をするから、お父さんはその話が嫌いだと言ったろ」

「どうしてお父さんがこの話を嫌いなのか、研究するんだ」

「お父さんは読んでやらないぞ」

「自分で読めるも一ん」

探求心とほどよい自立心。舌足らずなところが全くない話し振りで小学生低学年くらいかと当たりをつけ、私は好奇心の力を借りて目を開けた。

件の絵本を両手で抱えている男の子は、私の予想に反して、（おそらく）まだ四、五歳。してみると、かなり利発な子だ。

「あ、おばちゃんが目を覚ました！」

『おばあちゃん』でいいのに。そう思ったにもかかわらず、『おばあちゃん』と呼ばない利発男子に好感を抱いてしまうのは女の性か。それとも、年寄りの素直な気持ちなんだろうか。

「あ、大丈夫ですか」

利発男子の相手をしていたお父さんが、私の方を振り返る。

「はい。倒れたんですか、私」

私の声が掠れているのは、体調不良のせいではないだろう。普段、声を出すことがないので、喉が仕事の仕方を忘れてしまっているのだ。これも一人暮らしの弊害。

スーパーはセルフレジ。飲食店もセルフオーダー。図書館ですら自動貸し出し機が導入されて、人と言葉を交わす場面が皆無の現代社会。私の喉の仕事の機会は極めて少ない。

私は、声と同様に掠れてぼんやりした自身の記憶を辿り始めた。倒れた直後、誰かに「大丈夫ですか」と声をかけられたことを思い出す。

それが、このお父さんだったのだろうか。そして、この人が私をこの長椅子まで運んでくれたのだろうか。

申し訳ない。謝らなければ。そう考えて、私は身体を起こそうとした。そこに、お父さんが話しかけてくる。

「救急車を呼んだ方がいいのかと思って、深刻な持病があるかどうか、お聞きしたんですが……」

私は、「ただの貧血です。すみません」と答えたい。それで、救急車を呼ぶことはしなかった——と、彼は現況を説明してくれた。

「あの……職員の方ではないですよね……？」

「はい。通りすがりの者です。ここに運ぶのは職員の方も手伝ってくださったんですが、お仕事があるので、カウンターの方に戻られて——」

それはつまり、彼は私を介抱する義理も義務もない赤の他人だということ。私は慌てた。

「それは申し訳ありません。お手数をおかけして」

「いえいえ。困った時はお互い様です。歩いて帰れそうですか。タクシーを呼びましょうか」

「そこまでひどくは……」

恐る恐る上体を起こしてみる。さーっと全身が冷える、あの感じには襲われない。大丈夫そうだ。そう思うと、本当に大丈夫になったような気がした。

「大丈夫そうです」

「それはよかった。息子の借りる本も決まったようなので、では、私はこれで」

「本当にすみませんでした。見ず知らずの方に、お時間を割かせて、お手間を取らせて――」

再び倒れる不安を感じずに幾度も頭を下げられる自分に、私は安堵した。

「おばちゃん、ばいばーい」

父親と手をつないだ利発男子が、正面玄関のドアのところで振り返り、私に手を振ってくれた。

朝食後、少し喉に痛みを感じて風邪薬を飲んだ。その際、成人一回分を飲んだのが今日の初体験の原因だろうと、痩せて血管の浮き出た自身の手の甲を見て、私は察した。

家族も友人もない一人暮らし。「誰にも迷惑をかけず、誰からも迷惑をかけられず」が私のモットー。それが理想の日々。そう思っていたのだけれど。

誰かと会話らしい会話を交わしたのは何年振りだろう。久しぶりに喉に仕事をさせてやれたせいか、倒れた直後だというのに、気分がいい。心身が弾んでいる。

明瞭になった頭で、私は、通りすがりの老女を助ける義理も義務もない親切な父子にまともに礼を言えなかったことを思い出した。ちゃんとお礼をしなればと、私は義務のように思った。

翌日も翌々日も、私は同じ時刻に図書館に行ってみたのだが、あの父子には会えなかった。やっと会えたのは次の日曜日。

（よかった。会えた！）

命を助けてもらった鶴が、親切なおじいさんの住まいを見付けた時、こんな気持ちになったのではないかと浮かれながら、私は父子の許に駆け寄った。

「すみません。先週、ここで倒れて助けていただいた者です。憶えてらっしゃいますか」

「ああ。元気になられたようで、よかったです」

父子の周辺の空気は、今日も明るかった。

「会えてよかった！ 先日はぼうっとしていて、まともにお礼もできなくて…
…。ぜひ、お礼をさせてください」

「お礼なんて、そんな大したことはしてませんよ」

「見ず知らずの他人のためにお手間を取らせてしまいました。息子さんから、
お父さんと一緒にいられる貴重な時間を奪ってしまいましたし」

形ばかりの礼をしたいのではない。自分があなた方にどれだけ親切なことを
してもらったのかを、私はちゃんと承知している。その事実を伝えるために食
い下がった私に、

「ぼく、奪われてないよー」

と、利発男子が応じてくる。君は今日もお利口だね。

「それで、あの……本好きの息子さんのために使ってください」

私は、親切な父子のために用意してきた図書カードを、お父さんに差し出し
た。

途端に、それまで柔和だったお父さんの表情が硬くなる。

なぜ？ 真逆の反応を期待していた私は、内心ひやりとした。

「気にしないでください。本当に大したことはしていない」

という父親の言葉に、

「おぼちゃんの恩返し？」

という利発男子の声がかぶさる。

その声の子どもらしい素直な調子に、私の緊張は少し和らいだ。

「そうよ。恩返しがしたいの。『つるのおんがえし』の鶴みたいに高価な織物を
贈ることはできないけど……」

「これからご自分の体調に気をつけてくだされば、それが恩返しですよ」

それは誰への恩返し？ 私が恩返ししたいのは、あなた方よ。

「それじゃあ、お二人への恩返しにならないですよ。あの、私のためと思って
受け取ってください。私、恩知らずになりたくないんです。借りを作りたくな
いというか……」

「こちらも恩返ししてほしくて助けたわけじゃないですから、お礼なんて不要
です」

押し問答になりかけたところに、また利発男子が割り込んでくる。

「おばちゃん。ぼく、『つるのおんがえし』を読んだんだ」

「あ……え？ ええ」

子どもらしく脈絡のない話。私はそう思った。でも、違った。

「あのお話、鶴がおじいさんに恩返しをして、悲しい結末になったんだよ」

「そ……そうね」

畏にかかった鶴を助けてやった心優しいおじいさんが、「私が機を織っているところを見ないでください」という、いわゆる『見るなのタブー』を破ったために、あの物語は悲しい結末を迎える。私はそう思っていたのだが。

「それって、鶴がおじいさんに恩返しをしようとしたせいなんだよ」

「えっ」

「鶴は『助けてくれてありがとう』って、おじいさんにお礼を言うだけでよかったんだ。なのに、高価な織物をあげて、おじいさんをお金持ちにしようとした。おじいさんの優しい心に、お金で恩返ししようとしたから、鶴は優しいおじいさんを欲張りの悪者に変えちゃったんだ」

「あ……」

それを、この一週間、この子は考えていたのだろうか。お父さんがその物語を嫌いな理由を研究していた？

おじいさんに命を救われた鶴の恩返しが悲しい結末になるのは、鶴がおじいさんの親切に富で報いようとしたから。純粋な優しさに値段をつけたから。

恩返ししてほしくて助けたわけではなかったおじいさん。そんな善良なおじいさんを、鶴は悪党に変えてしまった。鶴が恩返しをしなければ、おじいさんは悪党にならずに済んだのに。

利発男子の研究発表は、一瞬、私の息を止めた。

そして、「真面目で責任感のある人の方が『ありがとう』以上のお礼をしたがるんだって」という彼の補足説明が、私に教えてくれた。私が今、ひとりぼっちでいるわけを。

私は、人の親切に素直に感謝することがなかった。親切を借りだと思なす癖があった。だから、他人の親切や厚意に礼を返して（恩返しをして）、プラスマ

イナスゼロにしないと落ち着かない。むしろ過剰な礼をして初めて、借りを返すことができたと安心できる。

貸し借りの関係を綺麗に清算することで、相手の親切をなかったことにするのだ。

そして、一人になる。それが今の私だ。

優しさから生じた関係は、無理に清算しなくていいのだろうか。貸しや借りがあるままでも？

『ありがとう』だけでいいの……」

『ありがとう』だけでいいのに、私は肝心の『ありがとう』を言わず、「すみません。お手をかけて」ばかり繰り返していた。それこそ、優しい人の厚意を無にする最悪の対応だ。

恩返しをする人間は、当然、恩知らずな人間よりいいものだと思っていたけど、そうとは限らないらしい。この父子のように、恩返しを期待していない人たちには。

私は結局、親切な父子に対して恩を返さない鶴のままでいることにした。

つまり、私はこの父子と友だちになった。

以来、図書館で会うたび、利発男子の斬新な読書感想を聞いて、私は目から鱗を落としまくっている。

恩知らず生活は、とても楽しい。